

1. 授業改善アンケート～変更内容と回答状況～

2. 現状と課題（2013年度前期アンケートの結果から）

- ・基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて（基礎ゼミナール部会）
- ・情報リテラシー実践Ⅰの授業アンケートの結果（情報教育検討部会）
- ・実践英語教育（英語教育分科会）
- ・未修言語の授業アンケートについて（言語科目部会）
- ・理系共通基礎科目の授業改善アンケート結果について（理工学系FD委員会）
- ・教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて（教養・基盤科目部会）

授業アンケートの変革 ～授業評価から授業改善へ～

首都大学東京では、2005年の開学以来、全学共通科目のほぼすべての授業で「授業評価アンケート」を実施し、その結果を授業担当者にフィードバックすることで、より質の高い授業の提供を目指してきました。質問項目は、全科目共通の項目、各科目群独自の項目、授業担当者独自の項目から成っていて、それぞれ5段階評価で回答する形式です。しかし、授業担当者が5段階評価の結果の分布を眺めても、またこれらの分布を前年度の分布と比較しても、授業を改善するうえであまり参考にならないのではないかという懸念がありました。たとえば、「私はこの授業を受講して満足した」という質問に否定的な回答が多かったとしても、受講者が何に不満をもっているのか、どのように改善すれば満足度が向上するかという情報は得られません。また、受講者の具体的な意見を聞く自由記述欄も設けてありましたが、受講者は全部で10問以上の質問項目に回答しなければならず、さらに自由記述欄に記入する者はごく一部に限られていました。我々はこのような状況を踏まえ、アンケートによって授業の良し悪しを評価するよりも、むしろ受講者の具体的な意見、要望を集め、これを基に授業を改善し、それを学生に示す仕組みを作る方が効果的であると考えました。

そこで、今年度より授業アンケートの質問項目を授業改善に役立つよう大幅に変更し、アンケートの名称も「授業評価アンケート」から「授業改善アンケート」に改めました。具体的には、8問あった全科目共通の選択式の質問を、シラバスの有用性、授業時間外学習時間、授業の理解度、習得・向上できた知識や能力の4問に限定し、代わりに受講者が記述の回答に時間を割けるようにしました。記述式の質問は、「教員の工夫等授業の良かった点」、「改善してほしい点、可能ならば具体的な改善案」、「授業やカリキュラム全体および授業設備についての自

由意見」の3項目とし、受講者から様々な具体的な意見、要望を集められるよう工夫しています。また、受講者に授業で修得・向上できた知識や能力を選択してもらう質問では、授業担当者が修得を目的としていた知識や能力を、受講者が実際に修得できたと実感しているかをチェックできるようにしました。

一方、授業担当者に対するアンケートでは、「学生の要望を参考にして授業で変更した点」、「変更した点による授業改善の効果」、「学生の要望は理解しているが授業で変更しなかった点で、その理由を授業で学生に説明したもの」について尋ね、次年度の講義で受講者の要望にどのように対応したかを調査しています。受講者の意見・要望について教育効果を考慮し、改善すべきところは改善し、次年度の受講者に説明する。従来通り行うべきところは、変更しない理由を受講者に説明する。このような担当者の誠実な対応は、受講者がアンケートを回答するモチベーションを維持する上で重要であると考えられます。また、授業担当者のアンケートの回答は、本人の同意を得たうえで、学内で情報共有し、他の教員の授業改善に役立てることにしています。

今回のアンケートの変革によって、受講者の意見を次年度の講義に反映させ、その講義についてまた受講者の意見を聞くというサイクルを回す仕組みが構築できたと考えています。授業改善のためには、担当者と受講者の間のコミュニケーションが何よりも必要です。「授業改善アンケート」も、FD活動の実績作りとしてではなく、コミュニケーション構築のひとつの手段として活用いただければ、この上ない喜びです。

大学教育センター長・FD委員会委員長
山下 英明

1. 授業改善アンケート～変更内容と回答状況～

大学教育センター

本稿では、2013年度から始めた「授業改善アンケート」について、これまでのアンケートからの変更内容と新しいアンケートの回答状況を説明します。

1. 質問項目の変更

2012年度まで実施していた授業評価アンケートの全科目共通の質問項目は以下の8問でした。

- (1) 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。
- (2) 授業の目的を意識しながら学習することができた。
- (3) 教員の説明はわかりやすかった。
- (4) 教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。
- (5) 授業時間以外で、一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？
- (6) 成績評価方法について十分な説明があった。
- (7) シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。
- (8) 私はこの授業を受講して満足した。

今回改正した「授業改善アンケート」では、これらの質問項目を以下の4問に変更しました。

- 問1 この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。
- 問2 授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。
- 問3 授業時間以外で、一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？
- 問4 この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）。

問1については、シラバスが授業の選択時や履修時により有益な情報を学生に与え、教育の質が向上するよう、今後もシラバスの充実を図っていくので、その成果を常に観察したいという意図で新たに設定しました。問2は、これまでの項目(3)と類似の内容ですが、学生は教員の説明の良し悪しを判断しにくいので、率直に学生自身が理解できたか否かを聞くことにしました。問3では、各科目における授業外学習時間を把握する上で重要だと判断し、項目(5)をそのまま残しました。問4はこれまでの項目(8)を発展させ、DP（ディ

プロマ・ポリシー）で明記している学習成果（①専門的知識・技術 ②幅広い教養としての知識 ③コミュニケーション能力 ④情報活用能力 ⑤総合的問題思考力 ⑥論理的思考力 ⑦能動的学習姿勢 ⑧倫理観・社会的責任の自覚 ⑨異なる文化・社会への理解）のうち、どの学習成果を修得できたかを問うものです。授業の目的として設定した学習成果を、学生が実際に修得できたと感じているかを確認するとともに、この質問項目により教員・学生双方が各授業で修得すべき知識や能力を意識しながら授業に参加できるようになると期待しています。これまでのアンケート項目(1)、(2)、(8)はあまり授業改善のための参考にならないという理由で、また項目(4)、(6)は関連する要望があれば自由記述に記入されると考え、すべて削除しました。

2. 自由記述の回答状況

以上のように全科目共通の質問項目を必要最小限に限定したのは、なるべく多くの時間を自由記述に割けるようにするためです。また、「授業改善アンケート」では、自由記述の回答数が増加するように、これまでの授業評価アンケートで裏面に配置していた自由記述の質問欄を、選択式の質問項目の途中に挿入してみました。自由記述の質問項目は以下の3問で、これまでのものとほぼ同様です。

- 問5 この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください。
- 問6 この授業について改善してほしい点を、可能ならば具体的な改善案も含めて書いてください。
- 問7 その他、この授業やカリキュラム全体および授業設備について、自由に意見を書いてください。

2013年度前期に「授業改善アンケート」を実施した結果、表1のようにアンケートの実施率（実施した科目の割合）は概ね前年どおりだったのに対し、自由記述の回答数は大幅に増加し、全体ではほぼ3倍に達しました。また、自由記述の質問項目ごとの回答者1人あたりの回答数は表2のようになり、授業の良かった点に関する記述（問5）が半数以上を占めていることがわかります。また、改善点に関する記述（問6）

も5人に1人以上の学生が書いていて、授業の進め方、授業の内容、担当教員の説明などについて、多くの指摘が寄せられていました。100人規模の授業では、平均すると20件以上の記述が集まっている計算になり、同じ改善点が別の学生からも指摘されているケースも少なくないと思われます。教員にとって複数の学生から同じ指摘を受けると非常に印象に残り、積極的に改善を検討するモチベーションになります。

表1 アンケート実施率と自由記述回答数の変化

科目群	アンケート実施科目率(%)		自由記述項目回答数	
	2013年度	2012年度	2013年度	2012年度
基礎ゼミ	85.0	85.0	1130	299
教養・基盤	83.3	82.1	4188	1381
実践英語1a	92.6	94.3	1248	329
情報リテI	92.1	94.7	669	699
理系共通	91.0	90.8	2061	420
全体	88.3	88.5	9296	3128

表2 回答者1人あたりの自由記述回答数

科目群	良かった点	改善点	その他	合計
基礎ゼミ	0.5128	0.2135	0.1477	0.8739
教養・基盤	0.3587	0.2061	0.0850	0.6498
実践英語1a	0.5035	0.2670	0.1133	0.8839
情報リテI	0.3051	0.1595	0.0855	0.5502
理系共通	0.2669	0.2663	0.0991	0.6322
全体	0.3616	0.2233	0.0973	0.6822

3. 学習成果の修得状況

「授業改善アンケート」では、修得できたと思われる学習成果を具体的に選択してもらう項目を新たに問4に設定したので、その結果について分析します。表3は、科目群ごとに、選択された学習成果の総数に対する各学習成果の割合を示しています。どの科目群についても、専門的知識または教養としての知識の回答割合が

多く、授業を通して確実に知識が修得されていることが伺えます。一方、知識修得のプロセスを通して育まれるとされる各能力（選択肢③～⑨）については、いずれも回答数が少なくなっています。これは、これらの能力に対する学生の意識の低さが原因であると考えられ、今後教員が意識付けを行い、学生が知識の修得だけでなく、これらの能力の育成も意識しながら学習していくことが重要であると考えています。

また表4には、学習成果ごとに、どの科目群でその学習成果が選択された割合が多かったかを示しています。たとえば、専門的知識は、基礎ゼミ受講者の30.8%の学生が修得したと感じていて、すべての科目群で修得したと感じた学生の割合の合計は227.3%であったことから、基礎ゼミで専門的知識が選択された割合は13.6%になります。たとえば、問題思考力は、表3ではどの科目群も高い割合になっていませんでしたが、各科目群で問題思考力を選択した学生の割合を比較すると、基礎ゼミが最も多くなっています。基礎ゼミは、この他の学習成果の項目でも総じて高い割合を示していて、これらの能力の育成にとってPBL型授業が効果的であることがわかります。また、その他の科目群は、それぞれ修得を目的としている学習成果において高い割合を示していて、CP（カリキュラム・ポリシー）で明記されている各科目群の役割を果たしていると言えます。

今後、シラバスや授業を通して各科目が目標とする学習成果を周知するとともに、学生がそれらの学習成果を修得できたと実感できるよう、更なる授業改善が望まれます。

表3 各科目群で選択された学習成果の割合

	①専門的知識	②教養知識	③コミュニケーション	④情報活用	⑤問題思考力	⑥論理的思考	⑦能動的学習	⑧倫理観責任	⑨異文化理解
基礎ゼミ	11.9%	20.8%	16.6%	13.6%	7.2%	7.7%	12.3%	4.5%	5.5%
教養・基盤	26.0%	39.4%	1.2%	5.4%	5.0%	6.3%	2.7%	4.6%	9.4%
実践英語1a	12.8%	29.0%	8.1%	3.1%	9.2%	7.4%	11.1%	0.5%	18.9%
情報リテI	32.2%	17.0%	4.7%	29.1%	3.9%	3.4%	4.4%	4.2%	1.0%
理系共通	41.2%	17.1%	3.8%	2.2%	7.9%	18.9%	6.3%	0.8%	1.7%

表4 各学習成果を選択した科目群の割合

科目群	①専門的知識	②教養知識	③コミュニケーション	④情報活用	⑤問題思考力	⑥論理的思考	⑦能動的学習	⑧倫理観責任	⑨異文化理解
基礎ゼミ	13.6%	23.4%	57.4%	30.4%	29.7%	25.3%	42.8%	38.5%	21.3%
教養・基盤	18.7%	28.0%	2.7%	7.6%	13.1%	13.1%	5.9%	24.7%	23.3%
実践英語1a	9.5%	21.3%	18.4%	4.5%	24.7%	15.9%	25.3%	2.6%	48.2%
情報リテI	30.8%	16.1%	13.8%	54.6%	13.6%	9.4%	13.0%	30.3%	3.3%
理系共通	27.5%	11.3%	7.8%	2.9%	19.0%	36.3%	13.0%	3.9%	3.9%